

貨幣の非対称性、補完性、離散性

東京大学東洋文化研究所 黒田明伸

0. 構造としての貨幣

貨幣という存在は、貨幣を体現しているもの自体に由来するものではなく、貨幣ならしめている構造に由来するものである。つづめて言えば、貨幣は構造なのである。

ではその構造の特質は何かというと、回路をなしていることである。回路というからには環状に何かを結んでいるのであるが、結ばれているのは売りうる在庫を保有する者たちである。彼らの在庫の空間分布は均質ではなく、また処分ないし取得しようとする時間に偏差がある。そうした時空のよどみが在庫保有者の間に見えざる回路をつながせる。

ところがこのよどみ、なにもたった一つだけの回路をつながせるとは限らない。星間物質のよどみが複数の天体を創り出すように、在庫保有者を結ぶいくつもの回路が併存する複数の貨幣として現れもするのである。在庫のよどみがもたらすダイナミックな共依存構造として貨幣を把握するためには、貨幣として働く回路は併存しうること、そしてむしろその方が自然だということを認識しなければならない。実際、人類史はそのことを証明している。

ある構造において併存するわけであるから、当然ある貨幣とそれ以外の貨幣との関係は独立ではあり得ない。これから述べる、非対称性、補完性、離散性、といった特徴はそれらの関係を切りだして示そうとすることどもである。それぞれ異なる局面において現れる関係であるのだが、同じ構造から発現したものであることには変わらない。

0.1 本稿の接近方法の特色ならびに前提命題

本論には二つの特色がある。一つは、異なる財を異なる人がもつというような初期条件を設定するよりも、同じ財を持ちながら欲する時が違うことから、交換を必然化させる設定をしていることである。もちろん、だからといって異財保有者間の交換を排除しているわけではない。二つには、複数の貨幣の存在こそが貨幣の存在する意味を求めていることにある。まず単数の貨幣の原理を説明し、現実の複数の貨幣の存在をその応用問題として扱う通常の方法と比べると、全く逆である。本論では、われわれが現在なじんでいる排他的な単数貨幣の存在こそが、反対に、歴史的条件から説明されねばならない特殊問題となる。

また本論では、次の二つの命題を前提にしている。

(1). 消費され（消耗し）ないまま使用される財があるとする。その財の多数者への拡散は、同じ量のそれらを収集するより容易である。100の経営単位に働きかけてそれぞれ

から1の単位の財を収集させる費用の総和よりも、1の経営単位にはたらきかけて100の単位の財を分散させる費用の方が、小さい。

(2)．需要に時間的偏差が大きいほど、当該の財を当面の使用需要を越えて保有しようとする傾向が、個々の経営に強く生じる。

なお、本論で通貨という場合、物理的に移動する手交貨幣を指す。

(本稿に関連する文献を逐一引用すると、それ自体膨大な量となる。誌面の性格も鑑み、一切省略させていただくことにした。関連する研究者の方々には、ご寛恕を請いたい。)

1. 貨幣は競存する

貨幣は単数で存在しなければならないものではない。にもかかわらず、おおよその貨幣論は、単一の貨幣を想定することからはじめている。しかしそれは太陽系や銀河系といった上位の構造をぬきにして個々の天体の存在を論ずるのと同様なことなのかもしれない。天体間の関係を観察することから、個々の天体の成り立ちをさぐることができるように、貨幣もまた同様に貨幣たちの関係性からこそ明らかになる面をもっている。

表1は、18世紀末ベンガルにおける銀貨の流通の競存ぶりを示したものである。地域ごとに使用される銀貨が異なるというだけでなく、同じ地域の中で米の取引と布の取引とでは違った銀貨を使い分けるといようなことがおこなわれていたのである。しかもこの銀貨の流通というのは貨幣全体の重層的流通の中間階層をきりとったにすぎない。下の階層、上の階層ではまた異なる貨幣が使われていた。後述の図2でたとえるなら、せいぜいCかDの階層を示しているにすぎない。下のBではより零細な額面を代表する銅貨や貝貨が多数を占め、Dより上のEでは国庫通用性のある特別な銀貨や金貨が流通の主役となっているかもしれないのである。なお、ここで「貨幣が異なる」というのは、各貨幣の需給の変動によって、交換比率が変動するということである。

この「異なる」ということについて、もう少し付け加える必要がある。われわれを支配する常識では、1000円札と10円玉は同じ貨幣であって、1000円札1枚と10円玉100枚は同じ1000円を体現しているはずである。しかし、貨幣の競存状態においてはそうではない。ここでは、個々の貨幣がそれ自身の需給変動に反応してその比率を変える。10円玉を必要とする取引需要が高まる時、10円玉95枚や90枚が1000円札1枚と交換されることになる。このことは一面、1000円札という高額面通貨が10円玉という小額面通貨を代替しきれないということであり、また一面小額面通貨の供給に十分な弾力性がないということでもある。

1000円札1枚と10円玉100枚とが完全に交換可能なら両者の関係は対称律によるということになるし、また代替的であると表現することもできる。だが、ここでわれわれが着目しようとしている関係は、両者の交換が非対称律によるものとして現れ、また代替

的であるよりもむしろ補完的と表現しうるものである。そして史実は非対称で補完的な現象がけっして少数派ではなかったことを教えてくれている。

ではなぜ10円玉100枚と1000円札1枚との比率がずれるのか。そこに貨幣の構造を垣間見せてくれる糸口がある。

表1 ベンガル各地の競存する銀貨

地名	ルピーの種類	用途
デナジブル	ソナット	米や他の穀物
	英・仏アルコット	油脂、粗糖
	仏アルコット	麻
ゴラガト	シッカ	米や他の穀物
	仏アルコット	布、塩
	ムルシダバード・ソナット	砂糖、粗糖
ジェソール	シッカ	米、穀物、砂糖、粗糖
	ムルシダバード・ソナット	布、油脂
	仏アルコット	塩
ビシュヌブル	ソナット	穀物、竹、粗糖
	古ダスマシャ	油脂、金属
	アルコット	布

Sinha, (1938) Indian Currency Problems in the Last Decade (1926-1936), University of Delhi, p4.

2. 在庫のよどみ

まず、本論がどのような場を想定しているのか示しておこう。この通りの条件の社会が

実際に存在していたというわけではないが、かといってけっして特殊な想定ではない。

ア、ある空間に小農経営が分散して存在しているとする。それぞれは、自身の労働力 a 以外に、穀物 b 、布 c 、大型家畜 d を保有し、売買することができることにする。特定の所在地に小農が偏在していたり、特定の小農に財の保有が集中したりすることを避けるように、小農の所在地、労働力そして穀物・布・大型家畜の保有量にはそれぞれ分布関数が割り当てられている。そうすることにより、いわば、ゆがんだ空間を初期設定しないようにするのである。500人の成人労働力のうちの100人がある経営の下にあったり（そもそもそれは小農とは表現しえないが）、500匹の綿布のうちの200匹がある小農の保有にある条件では、これから述べるような構造とは別の型のものが想定されざるを得ない。これらの分布関数が実際に機能するには、社会制度的要因が考慮されねばないが、本論では所与としておこう。

イ、労働力、穀物、布、大型家畜のそれぞれの売買において、おおよそのそれぞれの需給の調整に関わる経営の数に差異があり、その差異は小農の分布状況にしたがって空間の差異となってあらわれる。

ウ、穀物、布、大型家畜の供給には季節偏差があり、その偏差は穀物、布、大型家畜の順に小さくなる。

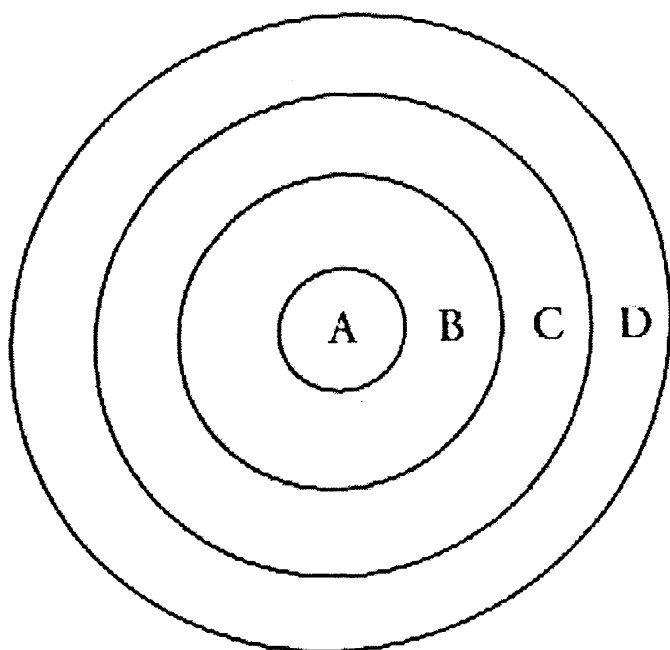
エ、穀物、布、大型家畜の順に運搬単位ごと（1kg や 100cc）の他財との交換比率は大きくなる（価値がおおきくなる）。

さて、小農はあくまで平面上に分布しているだけである。かれらは同じ空間の位相にいる。だが、彼らの保有する財の交換にとって、空間は同じではない。労働力を交換したり、穀物を売買したり、布や大型家畜をやりとりするおおよその規模は、それぞれ異なりうる。労働力というものは、売買対象になるもののなかでもとりわけ蓄積のきかないものであるが、財においても、穀物のように日々の消費にさらされるものと、布のようにそれほどではないものとに程度をわけることができる。より日々の消費にさらされる財ほど身近に交易の場を設けようとし、蓄積のきくものの交易はより広い範囲をまきこんで需給が調整される、という傾向が生じるのは自然なことである。図1は、小農たちにとっての交換の空間が、労働力A、穀物B、布C、大型家畜D、と広がっている様を示したものである。

実際こうした想定は、現実にかかなり合致している。表2は1933年の調査により中国の山東省の農村部の定期市で売買される商品の来源の空間的分布を示したものである。各定期市はおおよそ5キロ以内の居住者を集めている。i～viiに示したように、ある広さの空間とある商品群とが特定の対応することがみてとれる。このことは、財によって、優先的に需給が調整される空間が異なることを示唆する。vの穀物を例にとってみれば、輸入も含めた米や小麦の長距離交易はもちろん併存するのだが、後述の黄陵村の調査が示すように、身近の定期市に集まる範囲内での需給関係が、黄陵村に住む人々にとって、彼らの

穀物売買の相場を形成するもっとも規定的な要因となる。

図1 需給調整空間の水平的配置



黒田明伸『貨幣システムの世界史―非対称性をよむ』岩波書店、2003年、205頁。

表2 商品空間の重層性（山東省鄒平県11定期市における商品来源 単位 元）

	25キロ 以内	25～50 キロ	50～150 キロ	150キロ 以遠	計
機械製品		250	2805	8745 i	11800
手工業品	9190 ii	1850 iii	955	3575 iv	15570
農産品	36705 v		6775 vi	7195 vii	50675
計	45895	2100	10535	19515	78045

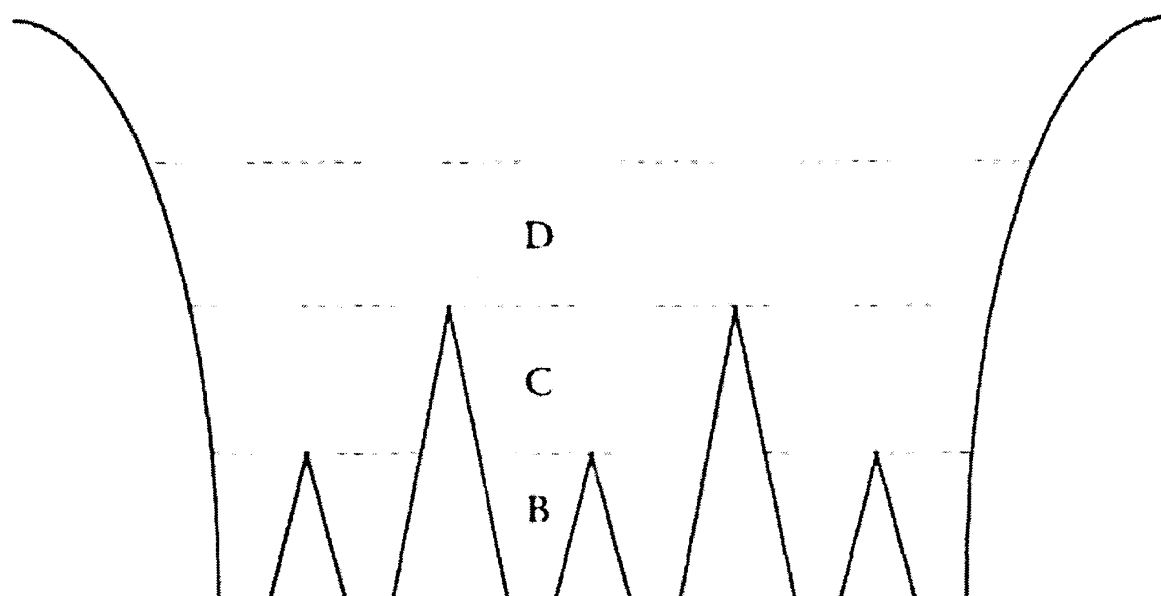
特徴的商品

- i マッチ、綿糸、洋布（機械織布）
 ii 土布（手織布）、靴 iii 帯、筆 iv 錫箔、
 v 穀物、野菜、家畜 vi 煙草 vii 茶

章有義(1957)『中国近代農業史資料』第三輯、三聯書店、北京、319 頁.

さてこれらの財ごとの需給調整空間の差異を水平的に示すと、図1のように中心の最小のAは日雇い労働の集まる範囲から、外へ市場空間B、C、D、が同心円状に広がっていくかのごときとなるのだが、これを、穀物のBを基底にして上方向へC、Dと重なる階層的な構成として、図2のように垂直的に認識することもできる。

図2 需給調整空間の垂直的關係



黒田明伸『貨幣システムの世界史』205 頁.

この伝統市場の重層性そのものは、これまでも指摘されてきたことである。図1の円の大小は、そこで主として扱われる財の奢侈品、日常品といった別にもおおよそ対応し、使われる通貨も、高額面の通貨が多い場と、零細額面のそれが多い場との別としても現れる。そこから、日常的取引に使用される銅貨など非金属通貨が使用される場面と、金銀貨がその範囲を越えて使用されるのを弁別する認識もすでにめずらしくない。

しかしこうした同心円状に各級市場が階層をなしている像は、同時に重大な誤解を招きやすい。その誤解とは、奢侈品交易・高額面通貨の多い上層市場と、日常品・零細額面通貨の多い下層市場との間の垂直方向の転換が、摩擦なしに円滑に為されているとみなしてしまうことである。史実が示唆してきたことは、この間の転換はけっして円滑にいくものではなく、上向転換と下向転換とが非対称になりうるということなのであった。なぜなのだろう。

表3は、中国の山西省太原県の黄陵村での農家の月別の農産物販売額を示す。1月から4月までの間には全農産物売却額の4.3%しかさばかれないのに、麦の刈り入れから粟の収穫の時期に当たる7月から10月までの間に70.0%が売られている。こうした農産物売却の季節的偏差は、当然農村における貨幣需要に大きな季節較差をもたらさざるをえない。またこの較差は農産物の購入側の貨幣需給にも関係するはずである。収穫期に都市から農村へ農産物買い付けの資金が流れ、それが都市部での貨幣需給逼迫をもたらすことが容易に予想されるのであるから。

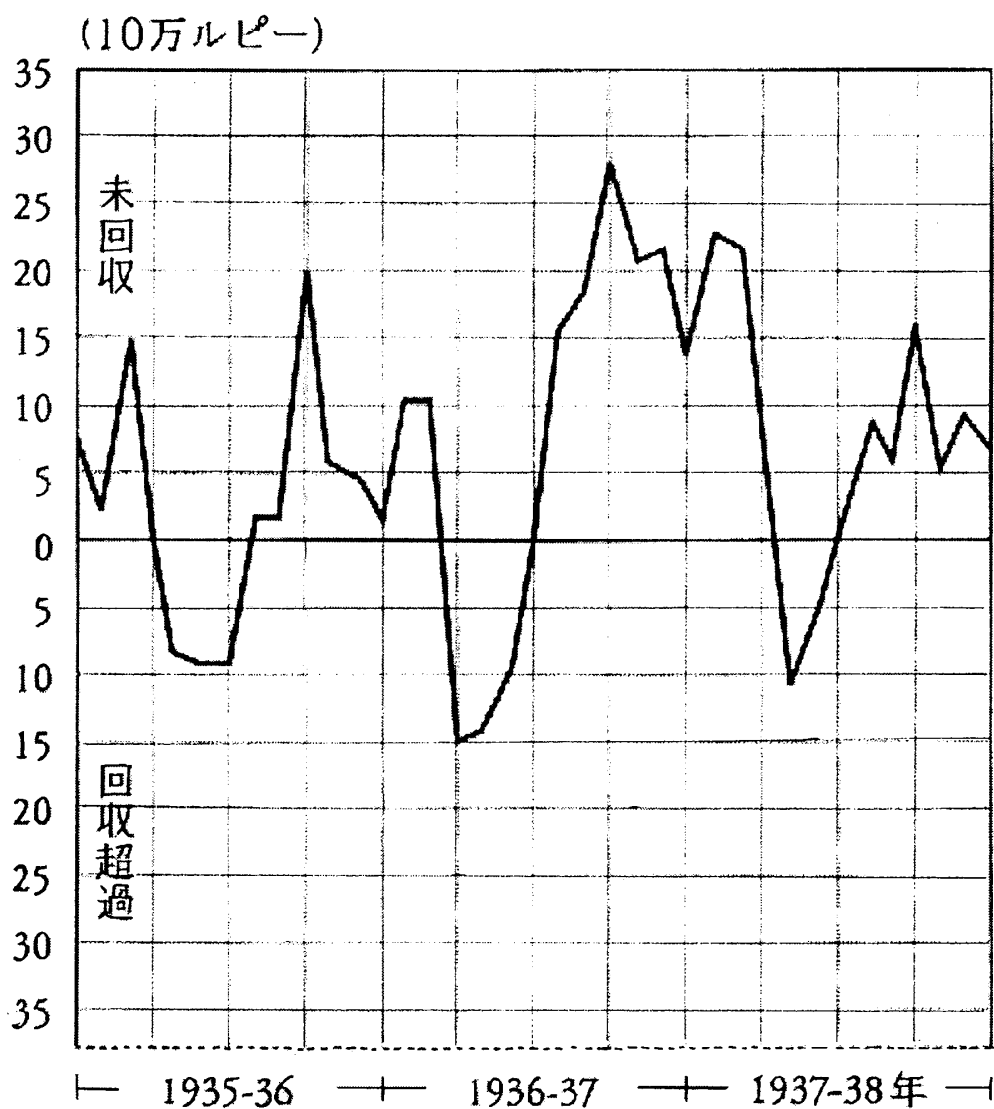
表3 小農による農産物売却の季節較差

月別農家販売額(山西省太原県黄陵村、1939年、単位 元)						
	穀物	野菜	計	村内販売	太原向け	庭先
1月	0	20	20	0	20	0
2月	0	0	0	0	0	0
3月	24	7.5	31.5	16.5	0	15
4月	57	0	57	42	0	15
5月	0	0	0	0	0	0
6月	17	100.8	117.8	3.75	70.75	43.3
7月	115	103.3	218.3	126.25	48.75	43.3
8月	214.5	99.67	314.17	192	122.17	0
9月	90.7	369.97	460.67	137.2	275.17	48.3
10月	377.52	401	778.52	409.02	269.5	100
11月	15	70	85	15	70	0
12月	297.4	149.67	447.07	284.9	132.17	30
計	1208.12	1321.91	2530.03	1226.62	1008.51	294.9

黒田明伸(1996)「20世紀初期太原県にみる地域経済の原基」『東洋史研究』54-4.

こうした通貨需要の季節較差は、通貨発行当局の統計にも反映される。図3はインド準備銀行の1ルピー以下の小額通貨の月別の発行額と回収額の差を示したものである。収穫期の秋にかけての時期に需要が高まり市場に流れていき、夏にかけて回収される、という季節性がはっきりわかる。

図3 インドにおける月別小額通貨の発行ならびに回収額(1935-38年)



黒田明伸『貨幣システムの世界史』198頁。

このグラフはもう一つ重要な傾向を明示してくれている。このグラフは、正であるなら発行額が回収額より大きい、すなわち保蔵される額の増加分を示す。逆なら減少分となる。実は、小額通貨ではなく主たる通貨であるルピー銀貨の月別発行・回収額も同様の波形を示しているのだが、そちらの方のグラフはおおむね負である。つまり保蔵分は減少し回収されつつあったことになる。対照的に、小額通貨は基本的に保蔵が増加する傾向にあった。

貨幣は人々の手を転々とする、すなわち循環するからこそ貨幣である。発行所があるならいつかはそこに還流するはずである。しかし、実は実際の貨幣は必ずしも還流していないのである。しかも、額面が小さい貨幣ほどその傾向、すなわち保蔵され還流しない性向が強くなる。本稿の前提命題による。図2の垂直階層でいえば、下の階層ほど、小額の日

常取引が多くを占め、その分だけ小額面貨幣を必要とする度合いが大きくなる。

ここでは二つの要因が階層間の貨幣移動の上下向が非対称を呈するよう作用する。

第一に、貨幣需要の変動特性が市場階層によって異なるということである。季節性の強い穀物たとえば粟の売買を主要部分とする市場空間Bと、季節性が弱い家畜や靴が売られる市場空間Dとでは、その貨幣需要の変動特性は異ならざるをえない。問題はその空間範囲がずれるため、同じ手交貨幣で二つの階層の市場の貨幣需要に応えようとすると、一方の需要が他方の供給を脅かしかねないことである。この緊張を緩和するためには、季節性の強い方の階層の市場に相当な貨幣保蔵が準備されていないといけない。

第二に、下層市場ほど日常的財の取引の割合が大きくなり、零細額面通貨の需要が高くなる。ところが、上層市場から下層市場へと通貨を散布すると、額面が小さい手交貨幣ほど下層に届き、そしてそれらの上層市場へ還流する程度は低くなる。つまり小額面通貨に関し、下層市場ほど需要が強くなり、上層市場ほど還流しないため供給が不足するという傾向をもたらすことになる。本章冒頭に示したインドの小額通貨統計は、このことを支持してくれている。

1で述べた、1000円札と10円玉の交換比率の揺れは、この二つの要因によるものである。こうした状況は、貨幣を統一的に維持するよりも、競争的に複数の通貨を保有することに合理性を付与することになる。そしてそれは階層ごとに通貨を自律的に保有する傾向を生じさせ、その結果、通貨の間の交換に非対称性が現れることになる。小農にとっては、たとえば、5000円分の小麦を都市からやってきた商人に何度かに分けて売却し、2000円分の遠方からもたらされる茶と、近隣で織られた布地3000円分とを買い、収支は合致しているのだとしても、それにともなうそれぞれ都市に上向する通貨と農村へ下向する通貨とは均質なものではないのである。

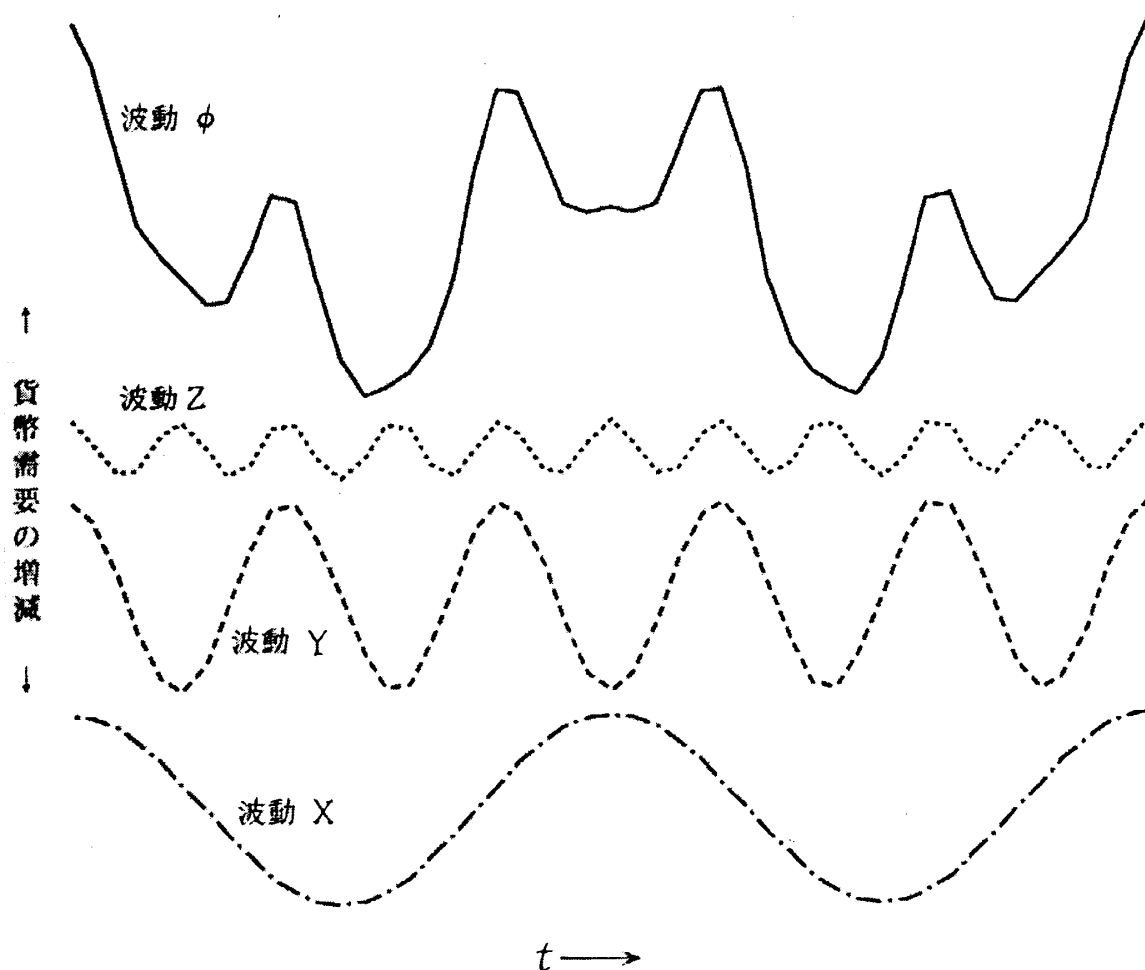
諸貨幣が競争する社会の方が、それぞれ独自の季節変動をもつことにより、総体として、単一貨幣に依る社会よりも多量の通貨を必要とする。本論の前提命題2による。その両者の違いを可視化させてみよう。市場空間B、C、D、において、貨幣需要がそれぞれ、図4のようにX、Y、Zの波動をもって変化すると仮定する（ただしこの波動そのものは現実を反映したものではない）。空間Bに居住する者たちにとって、一つの選択は、X、Y、Zに対応する貨幣を分けてしまうことである。そうすることで、他空間の貨幣需要の変動に影響されず、Xの波動にあった貨幣供給を安定的に保持することができる。同じことは、Cの空間で家畜をもっぱら扱う業者にとってもいえるかもしれない。

もしこれを一つの貨幣で対処しようとするとならうだろうか。最も単純に、B、C、Dの平均的取引規模が同じだとして、X、Y、Zの波動を合わせると ϕ のような不規則な波動となる。需要波動の振幅が大きいほど通貨を保蔵する傾向が強くなるとするならば、この波動の合同は、波を相殺することで振幅の総和を減少させているのであるから、 ϕ に合わせ単一通貨の導入は通貨供給を節減することを可能にする。

しかし、そのためには、この不規則な需要に弾力的に対応できる通貨供給を可能にする

機構が必要である。ところが、通貨、とりわけBのような末端市場で流通する小額通貨の還流性が低いから、そうした弾力的仕組みを構築するのは容易ではない。

図4 貨幣需要の波動の階層性



黒田明伸『貨幣システムの世界史』208頁。

3. 回路と空間

さて貨幣たちの間の関係を先行させたが、貨幣ひとつひとつは回路である。

労働力、穀物、布、大型家畜の4つの財・サービスの保有において過不足がある以上、小農経営間でそれらの交換が生じてくる。ただ、布を保有する甲が穀物を欲し、穀物を保有する乙が布を欲している、というように、異なる財保有者の間の欲求と保有の二重の一

致を交換の前提にする設定とは大きな違いがある。財がすべての構成員に分散しているというこの初期条件においては、均等に分散しているほど、そのような欲求の二重の一致は、意味が小さくなる。しかしそのような条件においても、供給の時間的な偏差は、同じ財についての異なる時間における欲求の交換を必然づける。4つの財・サービスの保有分布が小農経営ごとにばらついているので、同じ供給の季節偏差に対して、違った時間での需要を個々の経営がもつことが考えられる。その際、同じ財、たとえば穀物にたいする需要が、甲・乙・丙・丁の間でずれるとする。その時、 t 時に需要する甲、 $t+\alpha$ 時の乙、 $t+\beta$ 時の丙、 $t+\gamma$ 時の丁($0<\alpha<\beta<\gamma$)の間には、季節偏差の循環ごとに潜在的に甲→乙→丙→丁→甲という交換の回路が存在することになる。この関係をよく見知ったもの同士の閉じたものとして反対給付なしの一方方向の流れとして社会的に成立させると、信用の形成となる。これは匿名的な関係の間ではなりたちににくい。しかしこの関係において反対に何かの財、たとえば布をわたすことで回路を成り立たせることもできる。この時、彼らは布そのものを欲求しているわけではない。そのため、布そのものの需要や、布と穀物を生産するためのおおよその費用比率から乖離して、布は穀物とは反対方向へ流れることが可能になる。この時、布はすでに商品貨幣である。さらにその交換に際して計量単位（たとえば疋）が共有されているなら、それはほとんど額面貨幣に近い存在である。穀物のかわりに布を渡す回路は、反対給付なしの回路よりはるかに多くの参加者を引き入れることを可能にし、その匿名性を高める。この回路そのものは布を不可欠とするものではないので、何か別の財、はては単なる印をもって維持されることも可能となる。あるいは貨幣として機能し始めた布が、通常の布として使用されることを妨げるように、仕立てに不向きな幅のものにされて、かえって貨幣としての受領性を高めるということもおこるかもしれない。

だがA、B、C、D（あるいはさらに上層のE、F・・・）の空間のうちのどれがこの回路の形成と適合するのだろうか。本来グラフ状である回路が空間として現れるというのは一見奇妙だが、その回路がある財の需給調整を行う市場に通う者たちを結ぶものであるならば、糸が塊をなすように、自ずと空間を呈する。

そうした貨幣を成り立たせる回路が空間を呈する場合、その空間の可能な現れ方は連続的なものではなく、つまりAとBのどこにでも境界が現れうるという関係ではなく、AでなければB、BでなければC、というように、むしろ離散的に現れる。実際、これは経験的にほぼ確認される傾向である。とはいってもAのように狭い場が手交される貨幣の成立する空間となる事例は少ない。その理由としては、事例自体が零細すぎて史料に載らないということが第一に考えられることだが、もう一つには、生身の労働の交換の場が回路を形成する場合はそのまま社会関係に転換してしまいやすいからであろう。また逆にある程度以上の領域、たとえばDを越えるとまた広すぎるようだ。足を運ぶものたちの間という、共有された匿名性が成り立ちにくいのである。そうした広さを貨幣空間とするには、行財政による統合や貿易による強力な集荷といった要因が伴わねばならない。

Aの空間で法共同体が回路を形成するか、BやCで共有された匿名性を成立させるか（筆

者はこれを支払協同体 *local currency circuit* と呼称してきた)、D以上の規模でたとえば領主のような在地権力が年貢の収取とからめて貨幣を受領させるか、といった選択は、さまざまな要因の組み合わせによってきまってくる。また外的環境の変化によっても選択は変わりうる。ただ、閉じた社会関係である法共同体や、あるいは強制を伴う権力の存在によらずに通貨を共有する状態が、他の要因への依存性が少ないという点からは、もっとも安定した構造といえるであろう。

以上のような傾向があるからといって、なにも法共同体が存在すると必ず労働力交換の範囲で信用貨幣が成立し、封建領主がいれば、大型家畜や副業産品の需給調整範囲に対応した貨幣が指令的に流通させられる、というわけではない。繰り返しになるが、すべては、内そして外の条件の組み合わせにより決まり、また変化する。農村定期市の発達は、小額通貨の自律的な流通を促すだろうが、逆に小額通貨の頒布によって社会編成をもとに秩序形成しようとする権力の存在は、農村定期市の勃興に寄与するかもしれない。関係はつねに相互規定的である。これは単なる循環論法なのではない。共依存構造とは、どれかの局面を切り出せば相互規定のように現れるものなのである。

なお、あくまで共依存構造として貨幣は存在するのだが、その組み合わせのあり方が連続的ではないために、回路が呈する領域は、AとBの中間のどこかでもなくCとDの間のどこかで揺れ動くのでもなく、Cの貨幣空間がくずれたらAに収縮する、というように離散的に現れる。

たとえば、政府系銀行券が恐慌などで受領性を脅かされ、信用組合の預金を担保に地方町の商店街の発行する商品券が突然貨幣として機能し始めるなどということが生じたとする（実際、似たようなことは発生した）。この場合、政府系銀行券の受領される領域が徐々に狭くなっていくのでもなく、商品券の受領先が次第に広がって町全体を覆うというような過程をとるのでもない。貨幣を共有している空間が、国全体から町規模へ非連続的に遷移するのである。

4. 歴史的共依存構造としての貨幣

本稿のような話を示されると、必ず次のように反問がでる。「仮に10円玉に超過需要がある局面があっても、10円玉が供給過多な局面のところがあるであろうから、後者から前者へ10円玉の移動が起こって均衡が働くはずであるではないか。このような乖離がおこるにしても、情報交換と交通が正常にはたらいていれば自ずと解消される短期的不均衡にすぎない。情報交換に障碍がなくとも解消されないなら、何らかの非市場的規制が働いているにちがいない」と。しかし、これこそが、ダイナミックな構造の一部を切り取って静態として独立に把握しようとする誤った発想の典型である。10円玉の取引需要が強いという局面は、小口の米の買い付け需要によって引き起こされたのかもしれないし、また

その米市況は軍事行動による兵糧確保と局地的な豊作の連動した結果かもしれない。というように、より大きなエネルギー量をともなった変動要因が働いているかもしれないのに、10円玉の地域間移動という直接10円玉の需給に関する要因のみで把握しようとするところに、この発想の誤りがある。つまりは開かれた系として現れている事柄群を、無理矢理閉じた場を押しつけて理解しようとしているのにほかならない。

さて本論の表題には、「歴史における」と限定をつけるべきだったかもしれない。なにしろ我々なじんでいる排他的で額面間が対称関係にある貨幣においては、非対称性や補完性といった局面がみえてこないのであるから。だがそれでは、対称的で代替的な貨幣たちはどうして現れたのかと問いはじめると、対称的で代替的な装いの貨幣の方もまた歴史的な存在であることがわかってくる。したがって非対称で補完的なそれらの方にのみ「歴史における」と限定をつけるべきではないのである。排他的な貨幣の存在は、歴史的構築物である今日の国家、ないしは国民経済というものをぬきにして論ずることはできない。国民経済は、それ自身が世界経済という地球大の構造の一部であり、その構造を論ずることは本稿の課題を大きく越える。

ただ少しだけふれておくとするなら、排他的貨幣はどこかで自律的運動を制御しなければ生じないし、維持されない。何らかの人為的制御の組み合わせこそが必要となる。たとえば、穀物の売買と、布や大型家畜のやりとりの需給が同じ空間で調整されるように実効ある諸規則を設定する。そうして、小額通貨の発行を極力抑え、その代わりに商店の帳簿上で細かい取引まで相殺できるようにし向ける。何らかの要因の組み合わせが、このような制度設計をもたらしたなら、小額通貨が独自の需給に基づいて流通するという傾向をそぐことにはなるであろう。

現在の社会科学で流布している制度分析は、不確実性を軽減させるものをこそ「制度」として研究の対象にしている。不確実性の縮小は取引費用を軽減させ、市場の拡大を促すという前提が背後にある。しかし、本論で着目するのは、安定している部分的均衡に向かわせる自律性を抑え、不安定だがより大きな秩序形成へ向かわせるような制度的要因ないしはその組み合わせの構造なのである。

部分的均衡が多数併存する社会は、その社会大において通常の経済学が想定するような一般的な均衡を呈するようなことにはならない。財やサービスの移動・交換をことさらに妨げる制度的な仕組みは見えないにもかかわらず。対照的に、自律的な部分的均衡を抑制する構造を社会大に形成した国民経済では、一般的均衡が働くかのような外観に近づく（ただし実際に機能しているわけではない）。かつて筆者は、前者を非均衡型経済、後者を均衡型経済と表現した（黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会、1994年）。後者においては排他的貨幣が機能し、対称的で代替的な様相を呈する。政治経済学は、そこから生成した枠組みであるがゆえに、自らを相対視することが容易ではなかったのである。

最後に、表題の意味を確認しておこう。

1. 非対称性とは、市場の重層性と通貨の非還流性によって、同じ額の取引によって交換されたはずの別種の通貨たちが異なる評価を受けるようになる傾向を示す。
2. 補完性とは、同じく市場の重層性と通貨の非還流性により、貨幣の間に代替性がきかず、分業的に流通することを示す。ここでは、各通貨の単なる総和を貨幣総量としてとらえることに意味はない。
3. 離散性は二つの様態をもつ。ひとつには、回路としての関係は不断に通貨に額面を持たせようとする。そのため、連続的ではない幾つかの額面を代表する貨幣を併存させようとするものである。ただし、実際の通貨の間の交換比率は額面そのものの絶対比から常にゆらぐことになる。もうひとつは、補完的に機能する貨幣とそれぞれが主として担う領域との組み合わせが、やはり連続的ではなく、離散的に現れることである。具体的に貨幣を成り立たせている共依存構造を分析しようとするとき、この離散的様相は組み合わせを理解する鍵となる。本稿で特に問題としたのは後者の方である。